

医療領域における臨床心理実習の多面的評価方法に関する研究

A study on multiple evaluation of clinical psychology practice and training at medical fields

古田 雅明¹, 加藤 佑昌², 森本 麻穂³

¹大妻女子大学人間関係学部, ²医療法人社団慶神会武田病院, ³かながわ臨床心理オフィス

Masaaki Furuta¹, Yusuke Kato², and Maho Morimoto³

¹Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama-shi, Tokyo, Japan 206-8540

²Takeda Hospital

3193 Noborito, Tama-ku, Kawasaki-shi, Kanagawa, Japan 214-0014

³Kanagawa Clinical Psychology & Consulting Services

4-6-9 Nakacho, Atsugi-shi, Kanagawa, Japan 243-0018

キーワード：臨床心理実習，ルーブリック評価法，医療領域

Key words : Clinical psychology practice and training, Evaluation method using rubrics, Medical fields

抄録

本研究の目的は、心理臨床家養成のコア科目である臨床心理実習のルーブリック評価法を構築することである。具体的には、大学院の実習生と医療機関の実地指導者と大学院教員の3者間で何を実習の到達目標とするかを専門スキルの水準で評価する多面的な評価法の構築を目指す。

本稿では、一連の研究の第一段階として、病院実習に対して実際に教員が行なっている指導内容をテキストマイニングにより明確化することとした。分析対象のデータは2つの学外医療機関における院生6名の計130回分の実習記録に対する教員Aのコメントであった。クラスター分析の結果、教員Aが院生に対し共通して行っている指導内容を見出した。それらは、①病院臨床心理士や医療スタッフの患者さんへの関わりの理解、②患者さんとの交流の記述と理解、③心理検査を病院で活かす方法の3点であった。また、対応分析の結果を見ると、この教員は実習先と院生の個別性に合ったコメントをしており具体的には病棟体験がやや多い病院の院生には患者さんとの交流の意味を考えさせたり、院生の関心に応じて自己理解を促したりするなど、コメントの内容を変化させていた。

今後は、調査対象を広げるとともに、院生の実習記録と教員のコメントとの対応関係についても検討する必要がある。

1. 研究目的

1996年にスタートした日本の心理臨床家養成の大学院教育制度は、まもなく20年を迎えるとともに、今後は国家資格の公認心理師も加わり、養成教育は新たなスタートを切ることになる。この20年間、複雑化する現代社会の「こころ」の問題に対する社会的要請に応えるべく、各大学院が独自の養成教育を行ってきたが、心理臨床家が「こころ」という不可視の領域の専門家であるため、日本ではエビデンスに基づく教育というよりは、さまざまな学派による経験則に基づいた個性的な教

育が行われてきたとの批判があった¹⁾。しかしそれにもかかわらず、経験則による教育から輩出された臨床心理士は20年間の実績から、公的な資格に準ずる社会貢献をしてきたとも評価できる。とはいえ、数年後に実施される国家資格化を機に、養成教育においても、その大学院修了生の専門スキルの質をエビデンスと共に明確化すること、ならびに、有資格者の専門スキルの質を担保することがこれまで以上に求められよう。

この専門スキルを養成するための要となる教育が、臨床心理実習であることは論を待たないが、

さまざまな実習の中でも、とりわけ、精神科を中心とする医療領域における学外臨床心理実習が重要とされている^{[2][3]}。ところが、先の経験則に基づいたこれまでの大学院教育は個別性を重視するために、大学院生が獲得する専門スキルの水準も、大学院によって相当のばらつきがある。さらに学外臨床心理実習は、各医療機関の独自性に任されているために、実習先によって、実習内容だけでなく、現場教育の方法も相当に異なっている。そのため、大学院教育と医療機関の実習のミニマムエッセンスをエビデンスと共に明確にしていけないと心理臨床家の専門性を担保することが困難であるとの指摘がある。一方、日本臨床心理士資格認定協会は各大学院と各医療機関の個別性の高い実習の過程で、おのずと心理臨床家にとって必要なミニマムエッセンスが習得されると主張してきた。津川ほか^[4]の指摘通り、実習の総時間や内容、実習の到達目標を具体的に定めるべきとの主張と、基準を設定することが医療機関を束縛し現実的ではないという主張が混在している状態である。

この問題について統合的な立場から、さまざまな学派に共通する専門スキルを模索したり、あるいは Evidence Based Medicine (EBM) と親和性の高い認知行動療法を大学院教育の中心としたりする動向などもある。加えて、複数大学院による共同研究が行われ、学内外の臨床心理実習全体に関連する評価を大学院生が自己評価するだけでなく、教員も評価する実習到達度評定法が発表されている^[5]。

ただし、この評定法の項目が、カンファレンス・ロールプレイ・スーパービジョン・受付実習・学外臨床実習など、多岐にわたるため、包括的ではあるものの評価項目が抽象的であり、具体的な専門スキルを示していないという課題が残る。

以上の学術的背景を鑑み、心理臨床家の初期教育を専門としてきた筆者らは、心理臨床家の専門性を明確化することを試みると共に、院生が大学院教育を通じて何を実際に獲得してきたのかを探索してきた^{[6][7][8][9]}。

本研究では学外の臨床現場の要請と大学院教育の目標を相互に反映させることを目指し、医療機関の実地指導者との協同による多面的評価法として、臨床心理実習のルーブリック評価法の構築を目的とする。具体的には、実習生と大学教員と医療機関の3者間で何を実習の到達目標とするかを

専門スキルの水準で明確化するルーブリック評価法の作成を目指す。

研究は次の三段階に分けて実施する計画となっている。第一段階は、探索的段階であり、学外医療機関の実習指導を行っている大学院の教員が実習記録に対してコメントした内容と大学院生による実習記録の内容のテキストマイニングによる探索的分析である。

第二段階は、実証的段階であり、複数の教員による実習指導と第一段階の研究結果の照合を行うことである。また、他の病院における実習記録との照合も行い、第一段階の探索的研究で得られたデータの妥当性等を検証する。

第三段階はルーブリック評価法の構築段階であり、第一第二段階の研究結果を踏まえた上で、ルーブリック評価法を構築する。具体的には、第二段階までで得られた分析結果から病院実習において院生が最低限学ぶべきコアスキルを抽出する。次に、ルーブリック評価法のトライアル実施を行い病院臨床心理士による評価法の有用性の検証を行うことである。

本稿では、第一段階の最初の研究として、大学院の教員の実習へのコメントのテキストマイニングについて論じる。というのも、実際に病院実習に対して教員がどのような実習指導を行っているかの研究は少なく、効果的な実習指導や実習評価をするためにも、教員が自らの実習指導内容を自覚することの重要性が指摘されているからである^[10]。

そこで、本研究では院生の病院実習記録に対する教員のコメントのテキストマイニングによる分析をすることで、コアとなる指導内容の抽出を試みる。

2. 方法

2.1. 調査協力者

臨床心理士養成第一種指定大学院の教員 A (40歳代男性・臨床心理士・病院臨床歴 13年)

2.2. 学外医療機関における実習の概要

A が実習指導をしている学外医療機関は X・Y 病院の精神科であり、いずれも修士 2 年生対象の実習である。院生は週 1 回 8 時間の実習を 4~7 ヶ月 (15~27 回) 行う。両院の実習プログラムはほぼ同じ内容であり、病棟体験、作業療法やデイケ

アへの参加, 初診陪席, 心理検査等がある。但し, Y 病院は病棟体験が X 病院よりもやや多い。

2.3. 指導方法

実習前に教員 A による事前指導と大学院の上級生による実習の引継ぎが 60 分間の対面指導で行われる。また病院の臨床心理士が実習に先立ちガイダンスを行う。実習中は, 病院の臨床心理士が毎回の実習直後に 30 分間の実地指導を行う。院生は, 実習終了後数日以内に A に実習記録 (A 4×2 枚程度) を提出する。A は次の実習日までに実習記録にコメントを書き, 院生に返却する。これを実習期間中繰り返し, 実習がすべて終了した段階で, A が再び 60 分間の対面指導による実習後指導をする。なお実習期間中に適宜, A と病院の臨床心理士は実習に関する情報交換を行っている。なお, X 病院のみ病院の臨床心理士に A のコメントが付いた実習記録を提出している (図 1)。

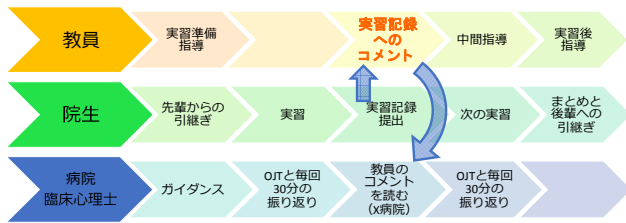


図 1 実習指導の流れ

2.4. 分析対象のデータ

テキストマイニングの分析対象のデータは院生 6 名分 (全員女性) の実習記録に対する A のコメント全 130 回分であった。テキストデータは合計で 81,502 字であり, 平均 626.9 字/回であった。

2.5. 分析方法

テキストマイニングには KH Coder (Ver. 2.Beta.32c) を用いた。分析に先立ち, 個人・機関名等の固有名詞を記号に置き換えた上で, 形態素解析ソフト「茶筌」でデータを分かち書きし 46,915 語を抽出した。抽出語の種類は 3,738 語であり, 内 3,208 語を KH Coder の分析に用いた。分析した品詞は, 名詞, 形容動詞など 16 品詞であった。また, 分かれて欲しくない単語の「心理」と「検査」を複合語の「心理検査」とする等, 85 語を強制抽出語とした。

3. 結果

抽出された語について, まずクラスター分析を

行い, 次に対応分析を行った。

3.1. クラスター分析

コアとなる指導内容の抽出のため, 出現頻度が 35 回以上の抽出語 43 語について階層的クラスター分析 (Ward 法) を行ったところ 7 つのクラスターを得た。以下〈〉はクラスター名, 「」は抽出語とする。

クラスター 1 は, 「コメント」「院生」「分かる」「実習」「今回」「患者さん」「先生」「臨床心理士」「良い」「自分」「医療スタッフ」といった抽出語から構成されていた。分かち書き前の自由記述を参照したところ, 実習先の臨床心理士や作業療法士や看護師などの医療スタッフがどのように患者さんとコミュニケーションをしているか, その様子に着目することや関わりの意味を知ることについてのコメントであったのでクラスター 1 を〈病院臨床心理士や医療スタッフの患者さんへの関わりを知る〉と名付けた。

クラスター 2 は「様子」「伝わる」「病棟」「記述」「実習記録」「書く」「コミュニケーション」「読む」といった抽出語から構成されていた。分かち書き前の自由記述を参照したところ, 病棟実習での患者さんの様子や, 患者さんと実習生とのコミュニケーションの記述方法に関する指導内容であったので, クラスター 2 を〈患者さんとの交流の様子を記述する〉と名付けた。

クラスター 3 は「医師」「陪席」から構成されていた。自由記述を参照したところ, 精神科医による初診の陪席について説明したり, 意味を考えたりすることを促すコメントであったのでクラスター 3 を〈医師の診察陪席の意味〉と名付けた。

クラスター 4 は「時間」「心理検査」「病院」「問題」「心理」「体験」「知れる」といった抽出語から構成されていた。自由記述を参照したところ, 心理検査に関する説明や臨床心理士の専門性としての検査の活用に関するコメントであったので, クラスター 4 を〈心理検査を病院で活かす方法〉と名付けた。

クラスター 5 は「話」「人」「多い」「臨床」「大切」といった抽出語から構成されていた。自由記述を参照したところ, 主に病棟での患者さんとの交流において気を付けることや临床上のポイントを説明するコメントであったので, クラスター 5 を〈患者さんと話す上で临床上大切なこと〉と名

付けた。

クラスター6は「関係」「重要」「理解」「テーマ」「難しい」といった抽出語から構成されていた。

自由記述を参照したところ、患者さんの様子だけでなく、患者さんと実習生との間の関係性を理解することとその難しさを伝えるコメントであったので、クラスター6を〈関係性理解の難しさと重要性〉と名付けた。

クラスター7は「伝える」「対応」「場合」「意味」「反応」といった抽出語から構成されていた。自由記述を参照したところ、実習生の態度や振る舞い、発言がどのように患者さんに影響を与えるかに注目させるようなコメントであったので、クラスター7を〈何かを伝えることの意味や反応を考える〉と名付けた。

表 2. クラスタ分析

クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4	クラスター5	クラスター6	クラスター7
病院臨床心理士や医療スタッフの患者さんへの関わりを知る	患者さんとの交流の様子を記述する	医師の診察陪席の意味	心理検査を病院で活かす方法	患者さんと話す上で臨床上大切なこと	関係性理解の難しさと重要性	何かを伝えることの意味や反応を考える
コメント	様子	医師	時間	話	関係	伝える
院生	伝わる	陪席	心理検査	人	重要	対応
分かる	病棟		病院	多い	理解	場合
実習	記述		問題	臨床	テーマ	意味
今回	実習記録		心理	大切	難しい	反応
患者さん	書く		体験			
臨床心理士	コミュニケーション		知れる			
良い	読む					
自分						
医療スタッフ						

3.2. 対応分析

次に教員のコメントと、実習先病院および院生との関係を検討するために対応分析を行った(図2)。(以下「」は抽出語)。

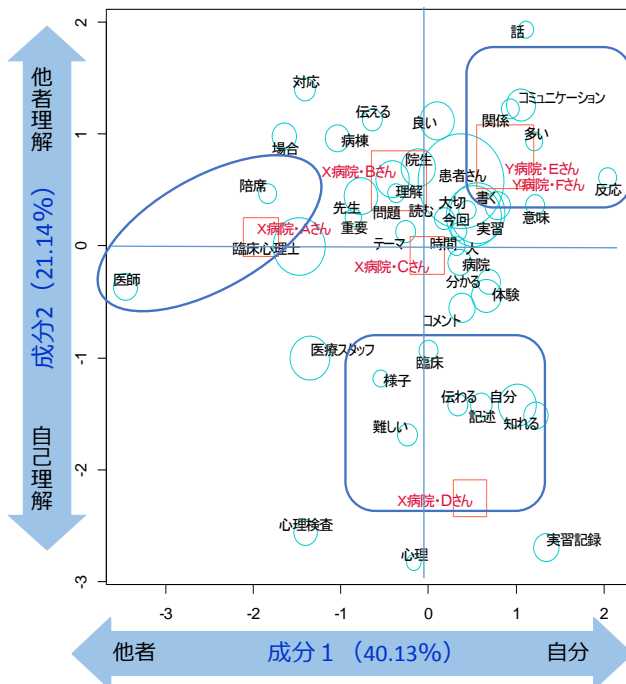


図 2. 対応分析

図中の X 軸と Y 軸に配置された抽出語を見ると、X 軸は左から右に「医師」「臨床心理士」「医療スタッフ」との実習先の専門職や「患者さん」、そして院生を示す「自分」と配置されていたので、実習先での他者と自分を分ける軸と命名した。Y 軸は下から上に「心理」「自分」「伝わる」「知れる」との自己理解を示す語から、「患者さん」「分かる」との他者理解、「伝える」「コミュニケーション」との交流へと変化したので、自己理解と他者理解の軸と命名した。すなわち、第1象限(自分・他者理解)に患者さんとの交流、第2象限(他者・他者理解)に病棟や診察の患者さんへの対応、第3象限(他者・自己理解)に他職種や心理検査の理解、第4象限(自分・自己理解)に自己理解に相当する抽出語が配置された。

その結果、X 病院の院生は主に第2象限に、Y 病院の院生は第1象限に布置され、X 病院の院生のうち1名は第4象限に布置されていた。

4. 考察

クラスター分析の結果、7つのクラスターが抽出され、それらがすべての院生に対する教員 A のコメントに共通する指導内容を示していると考えられた。これらのクラスターをまとめると、教員 A は①病院の臨床心理士や医療スタッフが患者さんに対してどのように関わっているのかについての理解、②院生と患者さんとの交流を実習記録に的確に記述し交流の意味を理解すること、そして③心理検査を病院で活かす方法の3点をコメントしていたと言えるだろう。また、対応分析の結果を見ると、A は実習先と院生の個別性に応じたコメントをしていると考えられる。具体的には病棟体験がやや多い Y 病院の院生には患者さんとの交流の意味を考えさせたり、院生の関心に応じて自己理解を促したりするなど、コメントの内容を変化させていた。なお、学外実習先から院生の社会人としての立ち居振る舞いといった基礎的マナーを指摘されることも多いが、今回の分析から、基礎的マナーを指導するようなコメントは抽出されなかった。基本的に院生の実習記録に書かれたことをベースに A がコメントしているために、院生自身が記述しない限り実習記録からは読み取りにくい課題であると考えられるだろう。

更に言うならば、いわば院生の社会性に関する点が、実地で On the Job Training を担当する病院の

臨床心理士と大学院で Off the Job Training を担当する教員との間で認識がずれるポイントになりうるということが示唆されたと言えよう。

5. 今後の課題

本研究では、実習指導をする教員のコメントを分析したが、今後は同じ病院実習において、院生が何に注目したり、困難を感じたりしているのか、そして何を学んでいるのかについて、その共通点の抽出を試みるために実習記録のテキスト分析を行う必要がある。

そして、ルーブリック評価法を開発するための基礎的な研究として、院生の実習記録の内容と教員のコメントの対応もしくはズレについても分析を行う必要がある。さしあたって、少数の教員が実習指導をする医療機関のルーブリック評価法を開発することは、上記の手続きに加えて実地で On the Job Training を担当する病院の臨床心理士との情報共有によって可能と考える。しかし、さらにルーブリック評価法の有用性を高めるためには、将来的に複数教員、複数医療機関、複数の院生を対象とした研究へと発展させていく必要があろう。

謝辞

本研究に協力してくださった臨床心理学専攻の大学院生の皆さんに記して感謝申し上げます。

日頃より医療領域における臨床心理実習において実地指導をご担当くださっている臨床心理士の先生方、また研究にあたりご助言を賜りました多摩心理臨床研究室の乾吉佑先生に心より御礼申し上げます。

付記

本研究は大妻女子大学「戦略的個人研究費」(S2633)の助成を受けたものである。

本稿は、「加藤佑昌ほか 病院実習の記録に対する教員のコメントの分析 —テキストマイニングによる分析から—。日本心理臨床学会第34回大会発表論文集。2015, p.402.」として発表されたも

のを加筆修正したものである。なお、加筆修正して再掲載するにあたり、共同発表者から掲載の許可を得ている。

引用文献

- [1]下山晴彦. 臨床心理学の教育・訓練システムをめぐって —英国および米国の状況を参考として—. 臨床心理士報. 2000, 12, p.19-32.
- [2]伊藤直文ほか. 心理臨床実習の現状と課題 —学外臨床実習に関する現状調査—. 心理臨床学研究. 2001, 19(1), p.47-59.
- [3]津川律子. 第9章 臨床心理実習2 —現場研修—. 下山晴彦(編) 臨床心理実習論 誠信書房 2003, p.369-398.
- [4]津川律子. “第1章 臨床心理実習における精神科実習の意味”. 津川律子ほか編. 臨床心理士をめざす大学院生のための精神科実習ガイド. 誠信書房. 2009, p.1-15.
- [5]鹿児島大学・九州大学共同プロジェクト. “臨床心理実習における客観的評価方法の構築”. <http://www.leh.kagoshima-u.ac.jp/kumcp/pgp/index.html>, (参照 2014-3-10)
- [6]古田雅明ほか. 臨床心理士の専門性に関する基礎的研究 —臨床心理士・看護師・訓練生の比較—. 心理臨床学研究. 2008, 26(2), p.218-223.
- [7]古田雅明ほか. 臨床心理士のキャリア形成に関する基礎研究(1) —修了生のアンケートから—. 大妻女子大学心理相談センター紀要. 10周年記念特別号, 2013, p.11-23.
- [8]古田雅明ほか. 臨床心理士のキャリア形成に関する基礎研究(2) —インタビュー調査の質的検討—. 大妻女子大学心理相談センター紀要. 2015, 12, p.1-14.
- [9]古田雅明ほか. 指定大学院におけるインテーク面接陪席実習の試み第2報. 大妻女子大学心理相談センター紀要. 2009, 6, p.15-25.
- [10]毛利伊吹ほか. 精神科での臨床心理実習における教育の視点. 日本心理臨床学会第33回秋季大会発表論文集. 2014, p.88.

Abstract

The purpose of this study is to construct a new evaluation method using rubrics for clinical psychology practice in hospital. As the first step of this study, we tried to clarify the actual guiding principles of a faculty of clinical psychology. In proceeding with the above, a faculty's feedbacks to 130 reports on clinical psychology practice in hospital were analyzed through the text-mining analysis using KH Coder. We performed a hierarchical cluster analysis and a correspondence analysis by using the components. Seven clusters of characteristics were extracted as a result of the hierarchical cluster analysis. These clusters means that some guiding principles of this faculty were as follows; 1. How to observe and understand a wide variety of clinical interventions by medical staffs, 2. How to describe their way to exchange with the patients, in order to grasp the meanings of relation between trainees and the patients. 3. How to use psychological tests effectively in the hospital setting. Further research is needed to clarify core skills that are necessary to work at medical fields, through the text-mining analysis of trainee's reports.

(受付日：2015年12月10日，受理日：2015年12月21日)

古田 雅明（ふるた まさあき）

現職：大妻女子大学人間関係学部准教授

専修大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程単位取得満期退学 博士（心理学）
専門は臨床心理学。主に、臨床心理士の初期教育に関する研究を行っている。現在は、特に初心者から中堅にかけての臨床心理士のキャリア形成プロセスに焦点をあてた研究を行っている。

主な著書：

臨床心理士になるには（共著，ペリカン社）

心理臨床家の成長（共著，金剛出版）

マルチメディアで学ぶ臨床心理面接（共著，誠信書房）

生い立ちと業績から学ぶ精神分析入門（共著，創元社）